

小 学 校

平 成 4 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成4年度

教育研究員名簿

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・ 下学年	品川	戸越	内山智恵子
	墨田	両国	加藤葉子
	世田谷	守山	邦本葉子
	日野	日野第八	小島義範
	世田谷	桜丘	篠遠信行
	中野	上高田	○棚田政治
	北	十条台	古川原一恵

◎ 全体世話人

○ 分科会世話人

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・ 上学年	葛飾	細田	大野和代
	足立	栗島	嘉宮厚子
	大田	池上第二	木村夏子
	目黒	大岡山	久保 栄
	田無	西原第二	○国分希久子
	府中	府中第一	小山治男
	江戸川	西小松川	篠 達司
	町田	本町田東	◎菅原 聡
	江東	亀島	中村和弘
	千代田	佐久間	星野良明
武蔵野	境南	横山 彰	

	地区名	小学校名	氏名
学 校 行 事	杉並	杉並第四	石野恵理子
	大田	女塚	○門脇 三昌
	国立	国立第五	塩野入晴み
	東村山	久米川東	清水 英夫
	練馬	南町	田口すみ江
	足立	東 湊 江	野原 義浩
	新宿	淀橋第三	福住 哲生
	江戸川	大 杉	不破 信一
	板橋	板橋第九	安武 吉子

	地区名	小学校名	氏名
児 童 会 活 動	昭島	拝島第一	伊藤 均
	練馬	上石神井	菅野 仁一
	立川	第 二	菊地 初美
	福生	福生第二	草間 陽一
	八王子	油井第一	清水 俊幸
	八王子	八王子第七	森永ひさぎ

担当主任指導主事 桑原 利夫 教育庁指導部

担当指導主事 有村 久春 多摩教育事務所

自己を生かし、互いに認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的、実践的態度を育てる指導

目 次

I	研究の概要	2
II	友だちのよさに気づき、力を合わせて活動しようとする意欲や態度を育てる指導の工夫 （学級活動下学年分科会）	3
1.	主題設定の理由	3
2.	研究仮説の設定	3
3.	研究内容 (1)仮説検証の視点と手だて及び具体的な取り組み (2) 実践事例	4
4.	まとめと今後の課題	8
III	共に高め合う学級活動をめざして、一人一人が自信をもって活動する指導の工夫 ——話し合い活動を通して—— （学級活動上学年分科会）	9
1.	主題設定の理由	9
2.	研究仮説と仮説検証の視点	9
3.	研究内容 (1)(2)実践事例	10
4.	まとめと今後の課題	14
IV	一人一人の児童が互いに認め合い、自主的に活動する児童集会の指導の工夫 （児童会活動分科会）	15
1.	主題設定の理由	15
2.	研究仮説と仮説検証の視点	15
3.	研究内容 (1)(2)(3)実践事例	16
4.	まとめと今後の課題	19
V	児童一人一人を意欲的に参加させ、社会性をはぐくむ勤労生産・奉仕的行事の指導の工夫 ——事前・事後の指導を通して—— （学校行事分科会）	20
1.	主題設定の理由	20
2.	研究仮説と仮説検証の視点	20
3.	研究内容 (1)(2)実践事例	21
4.	まとめと今後の課題	24

1. 研究の概要

共通研究主題

自己を生かし、互いに認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的、実践的態度を育てる指導

児童は本来、豊かな感性や可能性に満ち、興味や関心、意欲を最大限に発揮しながら、よりよく生きていこうとするたくましい生命力を内に秘めている。

しかし、近年の急速な社会の変化は、児童の生活形態や意識に大きな影響を与えている。例えば、核家族化や少子化、塾通い、遊び場の減少等に伴う一人遊びの傾向が見られ、児童の人間関係を希薄化させ、社会性や地域社会における連帯意識の乏しさをもたらしている。

従って、これからの学校教育においては、今後ますます変化するであろう社会に児童一人一人が主体的に対応し、自己の生活を向上させるため、友達と互いに協力しながら積極的に問題解決に取り組んでいこうとする態度や能力の育成が一層重要な課題となる。

そこで、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた人格形成と個性の伸長を図り、児童一人一人に自主的、実践的態度を育てる」ことを目指す特別活動においては、学校や学級生活の中で児童相互が認め合い、高め合う等の体験的活動を通して問題解決能力を育てることが大切である。

以上のことから、本年度は、①望ましい集団活動を通して、児童一人一人のよさや可能性を生かし自己実現を果たしていく意欲・態度の育成。②友達と協力して活動する体験を通して、互いに認め合い、高め合う人間関係を培う社会性の育成。③協力してより良い生活を築くために、学校や学級生活における問題を発見し解決に向けて自ら思考し、判断し、実践する力の育成等が大切であると考え、本研究主題を設定した。

なお、共通研究主題にせまるため、下記のように分科会の研究主題を設定した。

- 学級活動（下学年） 「友だちのよさに気付き、力を合わせて活動しようとする意欲や態度を育てる指導の工夫」
- 学級活動（上学年） 「共に高め合う学級活動をめざして、一人一人が自信をもって活動する指導の工夫 ——話合い活動を通して—— 」
- 児童会活動 「一人一人の児童が互いに認め合い自主的に活動する児童集会の指導の工夫」
- 学校行事 「児童一人一人を意欲的に参加させ、社会性をはぐくむ勤労生産・奉仕的行事の指導の工夫 ——事前・事後の指導を通して——」

II. 友だちのよさに気づき、力を合わせて活動しようとする意欲や態度を育てる指導の工夫

(学級活動下学年分科会)

1. 主題設定の理由

この時期の児童は、素直に自分を表現しようとする意欲や態度が旺盛である。また、人と人のかかわりが十分でない面もあり、限られた児童や教師にかかわりをもとうとする傾向がある。そのため、自己中心的な言動や自己本位な対人関係が生じやすい。

そこで、何でも言い・聞き合い、互いが信頼し合える学級の雰囲気をつくることや、共に活動する体験を通して得られる所属感や連帯感を培うことが大切である。温かな学級づくりや児童相互の信頼関係を培うことで、安心して、積極的に自分を表現しようとする意欲や態度が育っていく。そして、共通の目標を理解し、互いに認め合う活動を積み重ねることにより、自分のよさや友達のよさに気づき、協力し合う人間関係が芽生えるものと考えられる。

下学年分科会では、温かい人間関係を基盤とした望ましい集団活動を通して、①児童相互のかかわり合いを大切に、個々の児童の資質や能力を互いに認め合う人間関係を培うこと、②協力して活動する楽しさや喜びの体験を積み重ね、役割意識や実践的な態度を育てること、を中心に研究を進めることにした。

共通研究主題の関連においては、役割体験を通して自分の欲求が満たされ、成就感を味わえることが「自己を生かす」ことに、また、友達のよさに気づき、力を合わせて活動することが「互いに認め合い、高め合う活動」に関連するものと考え、本分科会の主題を設定した。

2. 研究仮説の設定

「楽しかった」という体験は、活動への主体的な意欲を向上させ、実践的な行動の原動力となるものである。さらに、児童相互のかかわり合いを大切にされた指導を工夫し、友達のよさに気づくよう援助し、楽しさや喜びを味わう体験を積み重ねれば、力を合わせて活動しようとする意欲が湧く。このような活動体験を通して、望ましい人間関係や学級の所属感や連帯感もはぐくまれる。児童相互のかかわり合いが深まり、互いのよさに気づき認め合えば信頼感も培われ、自己を表現しようとする意欲や態度も向上すると考え、研究仮説を設定した。

研究仮説

児童相互のかかわり合いを大切にされた指導を工夫し、楽しさや喜びの体験を積み重ねれば、力を合わせて活動しようとする意欲や態度が育つであろう。

3. 研究内容

(1) 仮説検証の視点と手だて及び具体的な取り組み

<p>視点1 友達関係を広げ深める指導の工夫</p>	<p>視点2 協力して活動する楽しさや喜びを体験する指導の工夫</p>
<p>育つ力</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 友達の行動や考えに関心をもつことができる 2. 友達のよさを見付け合い、学び合いながら活動することができる 3. 友達と仲よく助け合いながら活動することができる 4. 活動のめあてにそった発言や行動をすることができる 5. 役割を見付け、やりぬくことができる 6. 進んで活動することができる 7. 認め、励まし合いながら活動することができる 	

<p>授業研究の取り組み</p>	
<p>○多様な小集団活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活班、係、隣り同士、なかよしなど身近な小グループでの活動 ・意見や興味・関心が同じなど、志向が同じ者の小グループでの活動 	<p>○変化をもたせた活動内容の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しさや喜びを体験できる題材を通しての活動 ・一単位時間の中に、全員での話合い、小集団での話合い、個人やグループでの発表や作業などを効果的に取り入れた活動

<p>授業研究を支えるもの</p>		
<p>調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの調査 ・教師の観察 	<p>評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価及び相互評価 ・教師の助言、援助 	<p>教室環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級活動コーナー ・学級会グッズ

(1) 実践事例 3年 題材「力を合わせて、アイデアいっぱいの楽しい展覧会の共同作品を作ろう」

視点2《協力して活動する楽しさや喜びを体験する指導の工夫》「多様な小集団活動を工夫する」

手だて 展覧会の共同作品制作に向けて、一人一人のアイデアを募集し、アイデアごとにグループを作った。制作の前段階にグループ毎の活動（設計図作り）を取り入れ、それを学級活動の場で紹介し合い学級全体のものとした。さらに、作品制作に向けて困っていることを出し合い、問題解決のための話し合いを設けた。

題材の指導過程や、話し合いの中の小集団活動を通して、児童一人一人がもっている力を生かし、学級全体の人間関係を深めるとともに、問題解決のための話し合いや様々な役割活動を通して、一人一人が成就感を味わい、一層学級内の連帯感も高まるであろうと考えた。

授業の概要 本時は、①各グループの活動計画を発表②困っていることを相談するの二つを話し合いの柱とした。①では、みんなにわかりやすいよう、実際に設計図をもたせての発表にし、発表の際は役割分担を明確にした。②では事前に一人一人の児童が問題解決の方法を考えておき、本時の話し合いが実践に結びつくようにした。

話し合いの後の司会グループによる「よかったことの発表」や、学級会ノートにおける自己評価等、評価の工夫も試みた。

考察 制作準備や途中のグループ活動では役割分担を明確にしたので、一人一人の児童が生き生きと活動する姿が見られた。また指導過程にグループ内の問題解決のための話し合いや活動の報告会を盛り込むことにより、力を合わせて展覧会に向かおうとする意欲が出てきた。

これまで、学級で自然に発生する小グループは、得意なことや考え方が同じといった情動的な共感、心理的結合が大きな要因になっていたが、共通の目標に共同して向かう経験を通して互いに協力し、進んで活動しようとする意欲や態度が育った。学校行事に向けて全校的に盛り上がる雰囲気の中で学級として、一人一人の具体的な活動の場を設け、役割分担しながら協力することで、一人一人の成就感も増し、次の活動に結び付く集団の高まりがみられた。



(2) 実践事例 2年 題材「友だちたんけん」

・視点1 《友達関係を広げ深める指導の工夫》 「変化をもたせた活動内容の工夫（題材1単位時間の展開）

手だて 学級の人間関係における問題を解決するために、教師が意図的に行った指導であるが、その手だてとして児童の自主的な活動を採り入れた。「友達の宝（よさ）をみつけよう」という個のレベルでの認め合いの活動を経て、それを学級全体の認め合いへと発展するよう援助したのがこの授業で行った「友だちクイズ」である。友達のよさをクイズの形で皆に知らせ、メダルをあげることで心から賞賛し、認められた喜びを実感できるようにした。また、さらに意欲的に認め合いの活動に取り組めるよう「宝箱」にメダルを貼り、今後の意欲をもてるように工夫をした。これらの工夫により、友達への関心が高まり、よさを認め合う温かい人間関係が育つのではないかと考えた。

授業の概要 集会が始まり、順にクイズ問題が読み上げられると、3名の解答者が次々とカードを上げて答えた。とまどう解答者にはグループの仲間が助けに集まり、誰もが楽しそうな表情で活動した。メダルを手にした児童はそれを宝箱に貼り、満足気であった。教師は終末の助言で楽しい会を作り上げた学級児童全体

	プログラム	児童の活動	教師の指導・援助
活動の開始	1. はじめのことば 2. 先生の話 3. 元気の出る歌	学級活動の開始を告げる。 学級の応援歌を歌う。	・集会のわらいをはっきりわかるよう助言する。
活動の展開	4. 「友だちクイズ」をはじめることば 5. 友だちクイズ 6. メダルはり 7. 「友だちクイズ」をおわることば	会の開始を告げる クイズのルールを理解する。 順番にクイズを出題する。 相談し合いながらクイズに答える もらったメダルを宝箱に貼る 会を終わる言葉を言う。	・予めクイズの内容には目を通しておく。 ・はっきり話ができるよう助言する。 ・自分の考えを一言付け加えられるよう助言する。
活動のまとめ	8. 先生の話 9. おわりのことば	学級活動の終了を告げる。	・会の評価をする。 ・この会で友達のよさに気づいた児童を評価する。 ・進行役をねぎらう。

と、変容をねらうA児・B児の活動を評価した。

考察 「友だちたんけん」からクイズという流れに興味をもった児童が、今までかかわりをもたなかった友達の行動に注目し、そのよさを見出し出していく過程には大きな意義があった。1単位時間に児童は、クイズの出題・解答、メダルを受ける・渡す、宝箱に貼る、会を進行する話を聞く、と多様な活動を行った。題材とその展開を工夫することで、児童は生き生きと活動

し、その活動を通して友達とのかかわりを広げ深めることができると確信した。



(3) 実践事例 2年 議題「係へおねがいをしよう」

・視点1・2の併設 《友達関係を広げ深める指導の工夫・協力して活動する楽しさや喜びを体験する指導の工夫》 「変化をもたせた活動内容の工夫（題材・一単位時間の展開）・多様な小集団活動の工夫」

手だて 変化をもたせた活動内容の工夫としては、係の仕事の発表→班ごとの話し合い→お願いの発表→係ごとの相談、という流れで児童の多様な活動を取り入れ、一単位時間の展開を行った。多様な小集団活動の工夫としては、①係の仕事の発表の準備 ②係の仕事の発表 ③班ごとの話し合い ④係ごとの相談 の活動を取り入れた。

授業の概要 まず、係の仕事の発表を各係から行った。「配るものをできるだけ早く配ります。」（ゆうびん係）「ハムスターや十姉妹の世話をし、毎日えさや水をやります。」（しいく係）「朝・帰りの会で歌の伴奏をしたり、新しい歌をみんなに紹介します。」（ミュージック係）等発表された。次に班ごとに話し合い、係へのお願い



を発表した。「フラワー係は、花の名前をカードに書いてプランターにつけてください。」「おたのしみ係は、給食のときスポーツのクイズも出してください。」「ブック係は、みんなにおもしろい本を紹介してください。」「ニュース係は、楽しい新聞を作ってください。」等いろいろなお願いが出た。そして、係ごとに集まってお願いに対する返事を相談した。（発表は、翌日の朝の会で行った。）

考察 変化をもたせた活動内容の工夫では、班や係で話し合うことによって皆の前では積極的に意見を言えない児童も話し合いに参加し、楽しそうに友達とかかわる姿が見られた。また係と班といった構成の違ったメンバーで話し合ったので、児童の集中力が持続し、活発に活動することができた。これらの活動を通し友達関係を広げ深めることができたと考える。多様な小集団活動の工夫では、係ごとに仕事の発表をするため協力してポスターを作り、役割分担して発表するなど意欲的な態度が感じられた。また、班での話し合いの後発言する友達が途中でわからなくなってしまったとき、友達の発言を助ける態度が見られた。小集団での活動を多く取り入れることによって、協力して活動する楽しさや喜びを味わうことができたと考える。

4. まとめと今後の課題

(1) まとめ

ア. 友達関係を広げ深める指導の工夫

- 目的に応じた多様な小集団を組織し、相談や作業をする活動を通して、児童は具体的に友達によさに気づき、共に活動しようとする意欲や態度が育ってきた。
- 友達によさに気付くことで、友達の考えに関心をもち、共通の目的に沿った話合いができるようになった。
- 友達関係が深まることにより、児童が安心して意見が言えるようになり、一人一人の考えが活かされる機会が増えた。

イ. 協力して活動する楽しさや喜びを体験する

- 一単位時間の授業展開において、話合いの活動と実践活動を組み合わせたり、作業を取り入れたりすることにより、児童が興味・関心をもって活動するようになった。この活動が楽しさや喜び体験となり、協力して活動しようとする意欲が高まった。
- 「学級会ノート」等に自分の考えを書かせることにより、発言への意欲を促すことができ、話合いに参加できたという満足感を味わうことができた。
- 一人一人が役割や活動の場をもつことで、活動への意欲が高まり、成就感を味わうことができた。
- 板書の工夫をしたことで一単位時間の活動の流れを児童が理解し、主体的に活動できた。

ウ. 評価

- 一単位時間の評価の観点を明確にすることで、児童一人一人の課題が具体的になり、その変容をとらえることができた。
- 教師からの個に応じた賞賛や励ましや、児童の自己・相互の評価は、児童が活動の満足感や成就感を味わい、向上心をもつことに大きく関わっていることがわかった。

(2) 今後の課題

- 友達によさに気づき、力を合わせて活動しようとする意欲や態度を育てるための指導の工夫をしてきたが、児童の発達段階を踏まえた題材や一単位時間の展開の工夫については、児童の興味・関心を高めるための様々な活動内容を検討する必要がある。
- 評価方法については、児童のよさをとらえられる項目を検討してきたが、さらに題材のねらいに沿った評価の観点を個々の児童に応じて設定し、具体的に生かす評価方法を工夫する必要がある。

Ⅲ 共に高めあう学級活動をめざして、一人一人が自信をもって活動する指導の工夫

—— 話し合い活動を通して —— (学級活動上学年分科会)

1. 主題設定の理由

上学年の児童一人一人を見ると、学級の諸問題に気付き、自ら主体的に考えようとしている児童も多くみられる。しかし、このような課題意識をどのように表現したらよいかかわらなかったり、友達からどう思われるかを気にしたりするため、十分に自己を発揮できないことがある。また、自信をもって友達や学級集団にかかわることができないために、共に向上しようとする意欲や態度が高まらない面もみられる。

一方、学級活動の指導上の問題点として、特に次の二点があげられる。一つは、話し合い活動において、学級のすべての成員が題材に対する共通の問題意識をもつことが少なく、一部の児童の活動に終始しがちになることである。二つには、話し合い活動の評価の観点が明確でないために、発言回数の多さや司会の手際のよさだけが評価される傾向にあり、児童一人一人を伸ばす工夫に欠けがちなことである。そこで、本研究では、この二つの点を補うために、特に話し合い活動を通して指導上の工夫を追究することとした。

学級活動の基盤となる学級集団は、教師と児童、児童相互の信頼感に満ちた人間関係に支えられ、一人一人のよさを存分に発揮することのできる集団であることが大切である。信頼感に満ちた温かい人間関係の中でこそ、児童は意欲的に創意に溢れた活動を展開できるものである。

また、一人一人の児童は、教師や友達からよさや可能性を認められ、自らも気付くことにより、自信をもって活動するようになり、集団活動にも主体的にかかわるようになるものと考えられる。主体的にかかわることにより、友達のよさを取り入れながら共に高め合うこともできる。

以上のことを主題設定の理由とした。

「自信」については、「活動意欲に結びつく気持ちの高まり」と考え研究を進めた。児童は、友達や教師によって認められることにより「自信」をもち、次の活動への関心と意欲を喚起するとともに、新たな「自信」の発見をすることができるものと考えた。

2. 研究仮説と仮説検証の視点

一人一人の児童が、意欲的に話し合い活動に参加するためには、話し合おうとすることにつ

いて、学級全体の問題であるという意識を、事前にもっていることが大切である。児童が共通の問題意識をもつようになると、その問題を自ら解決していこうとする気持ちを持ち、自分ならこうするという考えをもって話し合い活動にのぞむことができるだろう。

さらに、話し合い活動においては、互いのよさを認め合う場を工夫することが大切である。児童が、自分のよさを認められ自信をもつようになると、失敗をおそれず安心して自分の考えを発表することが可能となり、そのことが、やがて共に高め合う学級活動の展開につながると考えた。

以上のことから、研究仮説を次のように設定した。

研究仮説

児童が共通の問題意識を持ち、互いのよさを認め合うことができれば、一人一人の児童が自信をもって話し合い活動に参加するであろう。

<仮説検証の視点> 視点1 共通の問題意識をもたせる工夫

<p>ア. 問題に気付くために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級全体で話し合いたいことを考える。 ・小グループ（係・生活班など）で問題を話し合ったり、書いたりする。 ・他学級の例を参考にする。 ・朝・帰りの会の発言の中から話し合いたいことを探す。 ・学級日記、班ノートを見直す。 ・日常生活をふりかえり、教師と共に考える。 など 	<p>イ. 問題を共有化するために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いたいことを提示する。 ・学級全体で、議題を決めるための話し合いをして、提案理由をふくらませる。 ・話し合い活動までの計画を立て、全員に知らせる。 ・その時間の活動計画を活用し、一人一人が考えをまとめて、話し合いにのぞむ。 ・話し合い活動の資料を共に準備する。 など
--	---

視点2 互いのよさを認め合う場の工夫

<p>ア. 相互評価・自己評価の場の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・互いのよかったことを発表し合う。 ・友達のよかったこと、自分のがんばったこと、がんばりたいことを記入する。 ・記入したものを互いに見合う。 など 	<p>イ. 教師の働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の評価の観点を明確にし、活動を具体的に認め励ます。 ・児童や学級の実態に即して伸ばしていきたい点を考慮し、評価の観点をしぼる。 など
--	--

3. 研究内容

前記の研究主題にせまるため、本研究では、1学期の話合い活動と、2学期の話合い活動を比較し、その変容をみてきた。(1)の事例は仮説検証の視点1について記述し、(2)の事例は仮説検証の視点2について記述したものである。

(1) 実践事例（視点1） 5年 10月議題「おばけやしき大会をしよう」

共通の問題意識をもたせる工夫

児童は、問題に気付くために小グループでの話合いを行った。話し合いたいことを見つけた児童は、みんなが見ることができるよう、提案カードに記入し議題掲示板に掲示した。さらに、問題を共有化するために、提案カードには賛同者氏名記入欄を設けた。

また、計画委員が見通しをもって活動できるように、議題掲示板に話合い活動までの手順を明記した。そして、計画委員が掲示してある議題案の中から適切なものを選び、学級全体で提案理由をふくらませる話合いを行い、学級全体の問題であるという意識を高めた。

授業の概要

- 休み時間に計画委員が、議題掲示板から議題を選択した。

「こわい話大会をやりたいという人が、一番多いよ。」

「提案理由が、暑い日に涼しくなるからだって。もう10月だよ。」

「次に多いのは、おばけやしき大会だよ。」
どちらにするか、帰りの会で、学級全体に問いかけて決めることになった。

- 帰りの会で「おばけやしき大会」に決定。

さらに、提案理由をふくらませた。

計画委「では、どうしておばけやしきをやりたいのですか。理由を教えてください。」
M 君「雰囲気があっていいから。」
N 君「みんなのびっくりした顔が見たいから。」
A さん「こわい話は前にやったことがあるが、おばけやしきはやったことがないから。」
K 君「こわい話はこわいと思うけど、おばけやしきは思い出に残ると思うから。」
H さん「話をしているだけでは、つまらないから。」
計画委「みんなの意見をまとめて、活動計画に提案理由を書きたいと思います。」

- 話合い活動の様子（数字は、評価の観点に基づいて分類したもの）

掲示用パネルでコースを作り、おどかす人・説明する人に分かれることが決定し、入場の順番を待っている人には、こわい話をするようになった。
N 君「入場する人は、1人でいいですか。」③④
司 会「では、何人で入場するかを決めます。」
A さん「大群で行くと道がつまるので、1人か2人がいいです。」⑧
H さん「Aさんに賛成で、たくさんでいくとこわくないから、1人がいいです。」①
Y さん「こわいと思うためにも、1人の方がいいと思います。」⑦
N 君「45分あるので、1人で入場した方がいいと思います。」④
G 君「もし事故があるとこまるから2人がいいです。」②④
R さん「G君と同じで、2人の方が安全だと思います。」①
O 君「だったら、好きな人数で入場したらいいと思います。」⑤
T さん「わたしは心細いので、O君に賛成です。」①
S さん「Tさんの気持ちもわかるけど、全員で入場しようかなるとこまるので、1人がいいと思います。」②③
H さん「はじめは1人がいいと思ったけど、最高2人とかに決めれば、O君の意見で問題ないと思います。」②⑥
このように活発な意見の交換がなされ、1人か2人で入場することになった。

考察

本分科会では、自信をもって話し合い活動に参加する児童像として、下記の①～⑧の意見を言うことができる児童と考えた。話し合い活動中の意見を下記の観点で分類していくと、1学期は、①・②の意見が多く、意見発表に留まっていた。2学期には、③～⑧の意見も増えてきたことから、問題を解決する方向に向かって、話し合いが充実、深化してきたと考えられる。

このことは、事前に共通の問題意識を高めたことで、一人一人が自分の考えをまとめて、話し合い活動にのぞんだからだと考えられる。また、学級全体の問題を自分たちの力で解決していこうという意欲が高まったからだと考えられる。

したがって、話し合い活動の事前に、共通の問題意識をもたせることは、一人一人の児童が、自信をもって話し合い活動に参加するために有効であることが分かった。

評価の観点	
①	友達・自分の考えを補足した意見 (賛同・つけたし・言いかえ)
②	友達の考えを聞き、新しい考え方・見方をした意見 (反対・ゆずる・違う見方)
③	話し合っていることの内容を確認した意見 (質問などをして)
④	司会を助けようとした意見 (話し合いの進め方などに関して)
⑤	以前の経験を生かした意見
⑥	話し合いをまとめようとした意見 (考えの違いを合わせるなどして)
⑦	めあて(提案理由)を考えた意見
⑧	実践活動に向けて、見通しをもった意見
⑨	その他の意見 (自分の意見を主張するだけの場合など)

(2) 実践事例(視点2) 5年 10月議題「雨の日の遊び道具を作ろう」

互いのよさを認め合う場の工夫

活動計画に「光っていた友達」(相互評価)「がんばったこと・がんばりたいこと」(自己評価)の欄を設けた。相互評価については、「光っていた友達の発表」という、互いのよかったところを発表する場を設けた。自己評価については、相互評価の後に行うことで、他から認められ、自分のよさに気付いたり、具体的な課題をもつことができるようにした。

終末の助言においては、その活動を個人名を挙げて具体的に認め励ました。「誰が」「どのように」よかったかを、具体的に評価することにより、児童が「光っていた友達の発表」をする時の視点になると考えた。また、学級の実態・一人一人の児童の実態から、伸ばしたいことを常に考察し、評価の観点をしぼった。この時、一人一人を伸ばすために、実態に応じては、前事例に挙げた評価の観点以外のことで認め励ますこともあった。

授業の概要

計画委員会では、議題決定までの話し合いをもとに、提案理由をふくらませ、活動計画を作成、配布した。児童は、事前に自分の考えを活動計画に記入し本時に臨んだ。本時では、まず、何を作るかについて話し合い、雨の日にみんなで遊ぶのにふさわしい遊び道具を決めた。

そして、個人の特性や、意欲を考慮して分担を決めた。

授業の終末では、「光っていた友達」を記入し、発表した。この時、教師は、発言量は少なくても話を聞いていた児童・発言に進歩がみられた児童・互いのよさを認め合うことができた児童にも目を向け、具体的に発言するように助言した。終末の助言では、個人名を挙げて、評価の観点にそって、活動を具体的に認め励ました。

次に示すのは、児童A・Bについて、「発言内容」と「光っていた友達（相互評価）の発言」を、5月の授業（議題「クラスの歌を作ろう」）と比較したものである。

5月議題 「クラスの歌を作ろう」	10月議題「雨の日の遊び道具を作ろう」
発言内容	
児童A「もとにする歌は、『大きな歌』が絶対にいいと思います。	「クラスは24人いるので、小さなトランプと大きなトランプの両方を作ればいいと思います。」
光っていた友達（相互評価）の発表	
児童B「クラスの歌を作るためにいい意見がたくさん言えました。」	「Kさんは、『竹とんぼ』という意見がでた時、提案理由の『雨の日に…』に戻って意見がいえました。」

考察

発言内容を見ると、5月の時は、児童Aの様に自分の意見を言うことができても言いっぱなしになっていたり、自分の考えに固執したりしていた。10月になると、付け足しをして新しい考えを出したり、違う意見のよいところを見つけ、折衷する意見を言ったりすることができるようになった。これは、「光っていた友達の発表」や終末の助言で、活動を個人名を挙げて、評価の観点にそって具体的に認め励ますことにより、その活動が定着してきたためであると考えられる。

「光っていた友達の発表」において、5月の時は、児童Bの様に「いい意見」「みんな」「頑張っていました」という抽象的な相互評価の発言をしていた。10月になると、「Kさんは」「提案理由の」といった、「誰が」「どのように」よかったかを認め励ます相互評価の発表に変わってきた。これは、教師が、終末の助言で「光っていた友達の発表」の時の視点となるように留意し、個人名を挙げて、評価の観点にそって、活動を具体的に認め励ますことを繰り返してきたためであると考えられる。

また、10月になると、「光っていた友達の発表」に取り上げられる意見の数が増えてきた。その中には、教師が終末の助言の中で取り上げようと思っていた意見も多く含まれるよ

うになった。このことから、児童相互に互いの活動を見る目が養われてきたと考えられる。

互いのよさを認め合う場を工夫することは、児童が互いのよさを知り、自信をもって意欲的に話し合い活動に参加するために、有効であることが分かった。

4. まとめと今後の課題

本分科会では、自主的で意欲的な児童を育てていくためには、自信をもって集団活動にかかわっていくことができるようにすることが大切であると考えた。共通の問題意識をもち、互いのよさを認め合うことができれば自信をもって活動していくであろうという研究仮説のもとに、話し合い活動を通して以下のことがわかり、また課題として残った。

(1) 研究の成果

視点1 共通の問題意識をもたせる工夫

- 議題の提案用紙の掲示などを工夫することで、一人一人が気が付いたことを学級の共通の問題としていくことができた。さらに、学級の諸問題に気付くようになった。
- 提案理由を学級全体でふくらませていくことで、議題に対し必要感を深め、自分の意見を考えるもととなっていく。また、話し合いを進めていくうえで、提案理由にもどって考える指針となった。

視点2 互いのよさを認める場の工夫

- 相互評価・自己評価の場を重視し、カードなどに記述することや発表することで互いのよさに気付くようになってきた。
- 評価の観点を明確にすることで、終末の助言の中で一人一人に対し具体的に認め、励ますことができるようになった。
- 評価の観点を継続的に記録していくことで、個々の変容と学級全体の高まりを把握していくことができた。

(2) 今後の課題

- 学級活動の計画カレンダーなど、見通しをもって活動していくことは大切なことであるが、計画委員会の活動を含めて時間の確保を工夫する必要がある。
- 評価の観点を9項目(12ページ参照)に分けたが、さらに授業を通してよりよいものにしていく必要があるであろう。
- 互いのよさを認め合うことは、話し合い活動だけで培われるものだけでなく、学級活動全体でみていくことが大切である。さらに、教育活動全体を通して互いのよさを認め合う指導を積み重ねていく必要があると考えている。

Ⅳ 一人一人の児童が互いに認め合い自主的に活動する児童集会の指導の工夫

(児童会活動分科会)

Ⅰ. 主題設定の理由

児童会活動は、学校の全児童の組織する児童会において、学校生活の充実向上のために諸問題を話し合い、協力して解決を図る活動を行うこと、またそれらの活動を自発的に行うことによって、自主性と社会性を養い個性の伸長を図ることがその特質である。

特別活動は、実践的な集団活動を通して、その目的を達成するものであるが、児童の人間関係が希薄化している今日、学校生活において、友達と協力したり、相手の立場に立って考えたりする態度が十分とは思えない。

児童会活動の実態調査によると、児童会の司会や記録などの役割を進んでやってみたいと答える児童は少なく、また、児童会の集会が楽しいと思っている児童も多いとはいえない。

自己中心的な言動や実践的態度が乏しいことにより、集団活動に対して興味や関心が薄れ、自発的態度や公共に奉仕する豊かな心の育成が問題となっている。

児童会集会活動においては、代表委員会、運営委員会は学校の全児童の代表であるという自覚の上に立ってこそ、児童たちは学校生活の向上発展を目指して建設的な意見を伸び伸びと述べることができる。しかしその選出はごく一部の児童によるものであったりしている場合が多い。また、代表としての役割を強調すればするほど、児童にとっては特別な能力や学力が必要と感じ、ますます代表委員会、運営委員会は全児童の代表としての役割りを果たしにくくなっている。

異年齢集団による活動である児童会集会活動では、特にその特質に留意し、子ども同士が互いに目的をもって楽しむ活動や、自分たちの生活を見直し、よりよくするための話し合い活動等、積極的に行う必要がある。そのためには、児童一人一人の興味、関心を高め意欲的な集団活動を行わせるために、全校児童の参加による、望ましい運営の方法や考え方等、児童が互いに認め合い高め合う中で、集団の一員としての自覚をもち、意欲的に活動する児童集会の在り方を研究するために本分科会の研究主題を設定した。

Ⅱ. 研究仮説と仮説検証の視点

児童一人一人が力を発揮し、待ち望むような楽しい集会にしたい。そのためには、児童が自分でアイデアをもち、やってみたいと思った役割に自由に取り組めるような工夫を考えたい。また、アンケートや話し合い活動を通して児童一人一人が意欲をもって、集会活動に参加できる

工夫をしたい。さらに児童会集会活動の特質をとらえ、他学年とのかかわりを深めていくような手立てが必要と考え、以下の仮説を設定した。

児童の考えを生かし、一人一人が自分なりの役割を見つけ、進んで活動に取り組めるような援助、工夫をすれば、互いに認め合い意欲的な集会活動になるであろう。

<仮説検証の視点>

視点1 児童が自らの考えを生かし、進んで活動に取り組めるようにする工夫		視点2 児童一人一人が自分なりの役割を見付ける工夫		
実行委員会……A 代表委員会……B		低学年	中学年	高学年
計 画 準 備 事 前	<p>ア児童へアンケート調査を行う A</p> <p>イ過去の資料等を活用する AB</p> <p>ウ広報活動を工夫し、全校児童の興味関心を高める B</p> <p>エ役割や仕事内容を知らせる AB</p> <p>オ実行委員会の参加を呼び掛ける B</p>	<p style="text-align: center;">目当てをもつ</p> <p style="text-align: center;">集会の内容を知る</p> <p>・集会のイメージを持つ</p> <p>・できる仕事を引き受ける</p> <p>・役割分担を受ける</p>	<p style="text-align: center;">集会を楽しむ</p> <p style="text-align: center;">目当てを理解し行動する</p> <p style="text-align: center;">全校児童が協力し活動をする</p>	<p>・集会の目当をきめる</p> <p>放送、ポスターで知らせる</p> <p>・役割分担の計画を作る</p>
実 践	<p>ア異学年同士が互いに協力できる内容にする。</p> <p>イ児童が何らかの役割を持ち、一人一人が所属感を味わえる活動にする</p> <p>ウ児童が活動しやすい環境にする</p>	<p style="text-align: center;">アンケートに良かった事、改善したい点を書く</p>		
評 価	<p>ア互いの良い点や努力した事を認め合い、作文や手紙等で表現する</p> <p>イ目当によって活動できたか、自己評価カードに記入する</p> <p>ウ係り児童の良さや頑張った点を認め全児童に紹介する</p> <p>エ代表委員会、実行委員会、各学級で反省会をする</p>	<p style="text-align: center;">自己評価カードに記入する</p> <p style="text-align: center;">次回の集会での自分の役割りを考える</p>		

実行委員について

児童の自主的参加による組織である。各校ごとの実態に違いはあるが、行事ごとに募集し企画、準備等司会、進行、係り活動も含め全校児童集会の中心的役割を任うものである。なお活動時間は二十分休みや放課後となり、児童の自主的な活動が主体となる。

事例1 計画の段階（学級活動－話し合い活動－）

4月から育ててきたサツマイモを校庭で焼き、全校児童で味わう集会を計画する活動である。全校集会を一部の児童の活躍の場とするのではなく、児童一人一人の考えを集会に生かすことによって、意欲的に集会に参加できるように、本時では集会の内容と名称について話し合いを持った。

ア. 本字に至るまでの経過

- 10月20日 計画委員会 集会のめあてとアンケートの原案づくり。
- 10月21日 代表委員会 原案についての検討 アンケートの実施。
- 10月26日 代表委員会 アンケートを集約し、ねらいにそって八つにしぼりこむ。
- 10月27日 代表委員会 各学級に議題をおろす（集会の中味、名称）
- 10月28日 本時 学級活動 「集会の内容を考えよう」「集会の名前を考えよう」

イ. 本事例で重視した仮説検証の視点

視点1. 児童が自らの考えを生かし、進んで活動に取り組めるようにする工夫

- 児童へアンケート調査を行う
- 広報活動を工夫させ、全校児童への興味、関心を高める

視点2. 児童一人一人が自分なりの役割を見付ける工夫

- 集会の内容や大まかな流れを決める活動に参加する

ウ. 考察

全校児童にアンケートを実施し、それをもとに学級での話し合い活動を行なったため、児童が集会を自分達のものとしてとらえられるようになってきた。今後、希望者による実行委員会を組織していくうえでの大きな動機付けになると思われる。また、集会の名称は、今までやきいも集会であったが、本時の話し合いにより、「アッチチ集会」という児童の発想を生かした集会名となった。

事例2 準備の段階（実行委員会の活用）

本事例は、全校児童集会「〇小祭り」に向けての準備活動である。三年生以上の児童を対象に実行委員を募集し、代表委員会、運営委員会、各学級との関連を図り、全校児童集会の運営をより多くの児童の参加によって活性化を図ろうとするものである。

ア. 本時に至るまでの経過

9月7日 実行委員募集（三年生以上100名以上参加）議題『どんな事をするか』『アンケート活動について』 計画素案作成

- 9月8日 代表委員会 計画の素案づくり、各クラスに提案
- 9月11日 臨時代表委員会『計画案決定』 運営委員会役割決定
- 9月12日 実行委員会役割決定
- 9月14日 各クラスにアンケート結果提出、各お店の内容決定
- 9月19日 実行委員会、運営委員会、各クラス準備作業開始
- 9月22日 のど自慢大会、特技大会参加しめ切り
- 9月24日 テレビ放送
- 9月25日 実行委員リハーサル
- 9月26日 本時

イ. 本事例で重視した仮説検証の視点

視点1. 児童が自らの考えを生かし、進んで活動に取り組めるようにする工夫

- どんな集会にしたいか、どんなお店があったらいいか、アンケートを取り、それをもとに各学級で取り組む。

視点2. 児童一人一人が自分なりの役割を見付ける工夫

- 計画段階で、実行委員会を組織し、多様な取組みへの機会を与え、自主的、主体的な活動が行なわれるようにする。
- 学級での取組みでは、一つに限定せず、また個人での参加も認める等、多種・多様な活動を図る。

ウ. 考察

実行委員会、代表委員会、運営委員会との関連を図ったことにより、集会が活性化され、児童の活動が意欲的になった。ただ実行委員会の参加人数が多く、十分な役割と指導が足りなかったと思われる。しかし、実行委員会の成功は、児童がこの集会に対して興味と関心をもっていることの表れであり、縦割り活動の役目も果たしている事がわかった。

事例3 実践の段階（異年齢集団の活用）

百周年の記念になるような集会にするため、4単位時間を設定し、全校的に取り組んだ集会である。兄弟学級のグループをもとにし、1・2校時は自分達のグループであそび、3・4校時は、工作オリエンテーリングを行なった。遊びの内容は、自分達で作って遊べるもの、工作オリエンテーリングも作った物でゲームが楽しめるような工夫をした。

ア. 集会の流れ

- (1)始めのことば (2)校長先生の話 (3)兄弟学級での制作 (4)工作オリエンテーリング (5)遊

びグループ、店番グループの交代 (6)終りのことば

イ. 工作、ゲームの内容

- 船 ○エアロケット ○メンコ ○缶つりゲーム ○竹とんぼ ○つりスビー ○パチンコ ○パッタンコ ○竹馬 ○すごろく ○ダーツ ○たこ ○ロケット ○紙ねんどバッチ
- パラシュート ○コリント式パチンコ

ウ. 本事例で重視した仮説検証の視点

視点1. 児童が自らの考えを生かし、進んで活動に取り組めるようにする工夫

- 異学年同士が互いに協力できる内容にする
- 児童に何らかの役割を持たせ、一人一人が所属感を味わえるような活動にする。

視点2. 児童一人一人が自分なりの役割を見付ける工夫

- 高学年……異学年児童に仕事を分ける
- 低学年、中学年……自分の仕事、役割がわかり積極的に活動する。

エ. 考察

集会の内容の希望を全校アンケートにより行なったことで、集会に対する意識が高まり、兄弟学級グループ内の連帯感やグループへの所属感が深まった。また全校的にオリエンテーリングを行なったことで、他の兄弟グループのよさや互いのよい所を発見し、積極的に自分なりの役割を見付けて活動する姿が見られた。

<まとめと今後の課題>

○計画、準備、実践、評価という一連の活動過程を大切にし、それぞれの段階における指導の手立てを工夫した。その結果、児童が進んで活動に取り組むようになるとともに、自分なりの役割を見付けようとする意欲が見られるようになった。

○児童会や各係、広報活動等を充実することにより、全校児童の集会への関心が高まり、各学級で話し合いも深まるようになった。また各学級と実行委員会の結びつきも深まった。

○実行委員会で多くの役割分担をすることにより、児童一人一人の努力を互いに認め合い、共にやり遂げた喜びを味わうことができた。

○今後の課題……実行委員会の組織 運用の工夫、児童への評価、児童の自己評価、相互評価の方法、さらに子どものよさや可能性を伸ばす効果的な計画や、実践のあり方について研究を深める必要がある。

V 児童一人一人を意欲的に参加させ、社会性をはぐくむ勤労生産・奉仕的行事の指導の工夫
——事前・事後の指導を通して—— (学校行事分科会)

1. 主題設定の理由

自然や社会事象との直接体験や他者とのかかわり合いの経験は、人が人として成長していく過程で最も基本となるものである。しかし、今日児童を取り巻く生活環境は、著しく変化し、直接経験の機会を減少させる傾向にある。

それは、児童の成長に大きな影響を与え、自然や他者を含めた生命を大切にしようとする意識を低下させたり、体を動かし働くことへの意欲を減少させたりしているといわれる。

このような状況下で、学校教育においては、自然や他者との直接的、協働的な触れ合いを通して、より豊かな心情をはぐくむことのできる教育活動を意図的、計画的に位置づけ充実させていくことが望まれている。そこで、本分科会では、学校行事の中にあって、体験的な活動を重視し、働くことの尊さや他に奉仕しようとする態度や実践力の育成をねらいとしている勤労生産・奉仕的行事に着目し、他者とのかかわり合いを大切にしながら学校行事に意欲的に参加する児童の育成を目指した指導計画の充実と事前・事後指導の在り方について探ることにした。また、この行事は、近年の環境教育の重要性のうえからも今日的な指導上の課題でもある。

2. 研究仮説と仮説検証の視点

研究仮説

児童の発達段階を考慮するとともに、他とのかかわり合う場を意図的、計画的に工夫することにより、児童は、互いのよさを認め合い、成就感を味わう活動体験が可能となり学校生活を充実させていくことができるであろう。

高学年になると働くことの意義を理解しながらも、実際に汗して働くことを好まない傾向がみられる。事前・事後指導において、活動の意欲を持続させる手立てを工夫することにより、働くことや他に奉仕することの大切さや喜びを味わわせることが可能ではないかと考えた。

仮説検証の視点を、①児童の発達段階に応じた勤労生産・奉仕体験の工夫。②児童の意欲や関心を高める活動ができる場の工夫。③かかわり合い、認め合う活動の工夫。④自己評価、相互評価の工夫を取り上げ、計画・準備・実践・評価という活動過程の各段階におけるねらいと教師の働きかけを明確にし指導計画に位置付けた。こうした一連の活動の中で児童の主体的な取り組みを大切に、補助・援助していくことが意欲の高まりへつなげると考えた。

3. 研究の内容

(1) 事前・事後の指導計画の工夫

学校行事に児童が主体的に取り組むためには、事前・事後の指導が大切である。そこで活動の時期に応じて事前指導の視点を・取り組みへの意欲を高める、・取り組みを促し充実させる、事後指導の視点を・成就感を味わわせ日常化を図る、と捉え指導の内容を充実させていこうと考えた。

勤労生産・奉仕的行事の指導計画の工夫

過程	意欲を高める視点	計画	期待する児童の姿	留意点	教師の働きかけ
事前の指導	取り組みへの意欲を高める	・実施計画決定 ・原案作成 ・教職員の共通理解	・意義やねらいが分かる。 ・活動の見通しがもてる。 ・めあてをもつことができる。 ・勤労生産・奉仕的な活動への関心をもつ。	○目的や意義が理解できるように考慮する。 ・適切なねらいや計画をたてる。 ・発達段階に応じた計画や準備をする。	
	取り組みを促し充実させる	・準備	・役割に応じて協力して活動の準備ができる。 ・個に応じて役割分担が公平にできる。 ・自己の役割と責任を認識して活動を進めていくことができる。	○協力して自己の役割が達成できるようにする。 ・実物（写真、ビデオ、紙芝居、絵地図等）を活用し意欲化を図る。 ・各教科・道徳との関連。	
当日	主体的に取り組む	・実施	・勤労生産の喜び、奉仕の気持ちをもって活動することができる。 ・互いに認め合い、励まし合って活動することができる。	・安全を確保する。 ・児童と共に活動し、円滑に活動が進められるように援助する。	
事後の指導	成就感を味わわせ日常化を図る	—評価— ・反省 ・事後指導 ・事後の処理	・互いの良さを知り、認め合うことができる。 ・活動を振り返り奉仕の大切さを理解し、働く喜びを感じることができる。 ・日常生活に生かしていこうとする態度を身に付けることができる。	○活動を振り返り、日常生活に生かしていけるように励ます。 ・自己評価・相互評価を工夫する。 ・成果を認め励ます。 ・次の活動への見通しや意欲がもてるようにする。	

<教師の働きかけ>

- ①活動範囲の明確化……児童の活動経験を踏まえ、活動できる範囲を明確にし、児童自らが見通しをもち主体的に取り組めるように配慮する。
- ②リーダーとしての意欲づけ……上学年では、活動の中心としての自覚や責任を意識し、活動できるように援助する。
- ③公平な役割分担……下学年は、全員がかかわって活動できるようにする。上学年では、公平な役割分担ができるように助言する。
- ④活動への意欲と期待……各教科や道徳、特別活動の他の内容との関連を図り、活動への期待感や関心を高め意欲を持てるようにする。
- ⑤異学年による活動……異学年での活動場面を設定することにより、活動に変化が生まれる

異学年のかかわりを通して意欲の持続化を図る。

- ⑥活動過程での補助・援助……児童の活動を大切にしながら、改善したい事柄に対して助言や援助をする。また、教師も共に活動を進め、補助していくことで意欲化を図る。
- ⑦成果を認め励ます……活動中、努力していることを積極的に認め励ます。事後も活動の様子を自己評価・相互評価し、成果を認め成就感を持つことができるように配慮する。
- ⑧日常活動への定着を図る……経験を生かし、学級や自己の生活の充実に取り組めるように考慮する。

(2) 学級活動における事前・事後指導の実践事例

① 児童の意欲や関心を高める活動を工夫した事前指導<視点①・②>

「さつまいもの収穫祭 =兄弟学年=〔4年と2年〕」

ア. 事例の概要

さつまいもの栽培活動は、長い期間にわたる活動である。そのために児童の意欲を持続させていかなければならない。そこで、活動への意欲化を図るために、活動への見通しがもてるようにした。収穫祭も、児童の自由な発想を生かし主体的に取り組めるように配慮した。また、活動過程で理科や図工等の教科との関連を図り、意欲を持続できるように工夫した。さらに兄弟学年で活動を進めることにより、上学年としての自覚や責任感も芽生えてきた。

イ. 授業展開

「食べられるくらいに大きくなっただろうか。」という思いの中で、教師が事前に掘ってきたさつまいもを見ることで収穫祭への期待を大きく膨らませることができた。話合い活動を進めていく中で、友だちと助け合ったり、協力して活動したこと等、今までの栽培活動を振り返り成就感を味わうことができた。

成し遂げた喜びは、主体的な話合いを生み、収穫祭では「さつまいもの成長の様子を紙芝居にして二年生に見せてあげたい。」

「劇にして表したい。」等の下学年の児童を思いやる意見も多く出された。

視 点	月	活動計画	ね ら い
取り組 みへの 意欲を 高める	4	土・畝づくり	・見通しをもつ。 ・目的、意義をと らえる。 ・分担手順の確認
	5	雑草抜き	
	7	苗植え (農園がらみ)	
取り組 みを促 し充実 させる	8	当番活動	・仕事の分担 ・内容決め (学級活動)
	5	収穫祭の計	
	11	画づくり	
当 日	11	収穫祭	・主体的な活動

ウ. 考察

4月当初に活動を明確にし見通しが持てるようにしたこと、児童が目的や意義を考え活動できるよう計画したことで意欲の持続化を図れたと考える。また、各教科との関連を図ることで、さつまいもについて調べたり、休み時間に栽培園に行きさつまいもの成長を観察したりする児童も多く見られた。意欲的な児童は、学校の栽培園ばかりでなく地域のさつまいも畑にも関心を示し様子を調査する児童も出てきた。また、兄弟学年での取り組みは児童の自信にもつながった。今後、児童の意欲の持続化を図るため、教師間の理解がより必要である。

① かかわり合い、認め合う活動を工夫した事後指導 <視点③・④>

「美化デー活動 =異学年の縦割り班活動=」

ア. 事例の概要

学年当初、毎月位置づけられている縦割り班の美化デー活動の目的や意義を確認した。

縦割り班活動を有効なものとするために、普段の学校生活の中でも縦割り班を中心とした遊びや話合いの場を設け、異学年の児童がかかわり合う場面を多くもてるようにしてきた。

また、六年生として異学年の児童全員が意欲的に活動していけるように、リーダーとして工夫するように働きかけることにより児童の意欲の高まりを促すことができると考えた。

活動計画に基づき実践を積み重ねて行くに従って、児童自身も見通しをもち手際よく活動を進められるようになるが、常に新しいかかわり合いがもてるように活動計画も工夫した。

イ. 授業の展開

「一年生が言うことをきいて仕事をしてくれて嬉しかった。」「四年生が一生懸命やっているから自分もしっかりやらなくてはと思った。」など認め合いが意欲につながる感想が出された。また、他班の六年生からの感想を聞き、おしゃべりを無くしたいという悩みや時間内に終わらないといった班も前回の問題点を次の活動のめあてとして取り組むことになった。

協力がうまくできている班では、すみずみまできれいにしたい等の新たな次のめあてをもつことができた。

月	美化デー活動計画〔縦割り班〕
5月	班の人の顔をおぼえよう
6月	班の清掃場所の掃除のしかたを知ろう
7月	仲良く掃除をしよう
9月	床やかべをきれいにしよう
10月	すみずみまできれいにしよう
11月	協力して掃除をしよう
12月	大掃除をして新年をむかえよう
1月	書き初めのあとをきれいにしよう
2月	入った時よりきれいな校舎にしよう
3月	ともに働いた仲間。ごくろうさま。

ウ. 考察

事後指導は、活動の締めくくりではなく活動で得た達成感を児童の内面に定着させていく活動であると考え。その過程で、かかわり合いや認め合いの場を設定していくことで児童の意欲を引き出すことができた。上学年として、班のリーダーとして活動の仕方や役割についての話し合いは、下学年の児童への配慮や自分たちの責任、役割意識となって次の活動へ生かされていった。また、活動後の感想や記録をもとに自己評価・相互評価をすることにより他の人のよさに気付いたり、達成感を味わうことができる。

4. まとめと今後の課題

児童の発達段階を考慮するとともに、他とのかかわり合う場を意図的、計画的に工夫することにより、児童は、互いのよさを認め合い達成感を味わう活動体験が可能となり学校生活を充実させることができるであろうとの仮説のもとに研究を進めてきた。ここでは、勤労生産・奉仕的活動の指導計画とそれに基づく実践事例での研究の成果と課題について述べる。

(1) 研究の成果

ア. 事前指導について

- 事前・事後の指導計画の作成により、児童の関心や意欲を高める指導が段階的にしかも効果的に実施できた。
- 事前指導において、写真、ビデオ、紙芝居、収穫されたさつまいも等視覚に訴える実物を活用することで関心や意欲を高めることができた。
- 行事への関心、意欲を高めるために各教科との関連を考慮した指導も効果的である。

イ. 事後指導について

- カードや活動の感想・記録をもとにした話し合いは活発になる。そこで相互評価し合うことで次の活動への児童の意欲を引き出すことができた。
- 教師の的確な補助・援助が児童の実践意欲を高める。

(2) 今後の課題

- 仮説検証の視点にせまるための教師の働きかけは、各学年に分けてきめの細かい内容にしていく必要がある。
- 活動の定着を図るために発達段階に応じた指導内容を明確にしていかなければならない。
- 勤労生産・奉仕的行事の場合、学校を取り巻く環境により取り組みに大きな違いがみられる。教師間の共通理解を図り、学校の特徴を生かした計画作りをしていく必要がある。
- 事前・事後指導の時間の計画的な確保も大きな課題である。